

二〇二五年度 大妻中野中学校 第三回アドバンスト入試

(二月二日午後 問題用紙)

国語

座	席	番	号
			番

受	験	番	号
			番
			氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて全部で13ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認してください。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(ただし、句読点や記号も一字に数えます。)

恋人とのデートがきっかけで初めて美術館を訪れた全盲の白鳥建二さん。その日、作品を前に語られる言葉を聞きながら「全盲でもアートを見ることはできるのかもしれない」と思うようになった。そして白鳥さんは美術館の開拓を続けていく中で、知人に勧められたのが水戸芸術館だった。

二度目に白鳥さんが水戸芸術館に来たときに開催中だったのは、蛍光灯を仕込んだライトボックスと写真を使った作品で知られるカナダのアーティスト、ジェフ・ウォール（一九四六～）の展覧会。その日*1アテンドを担当したのは、教育プログラム担当をしていた森山純子さんだった。上司（その後、横浜美術館館長を経て現在国立新美術館館長の逢坂恵理子さん）から「全盲のひとが展示を見に来るので、展覧会と一緒にまわってほしい」と頼まれたという。

え？ ①全盲のひとが美術館に？ と森山さんは驚いた。もともと盲学校の近くで育った森山さんは、白杖を使って街を歩くひとを多く見てきたが、全盲のひとが美術鑑賞するという姿はどう想像できなかった。現れたのは、物静かな雰囲気、男性だった。

森山さんは、どんな風に話をしたらよいかと迷いながら、逢坂さんと三人で作品を見てまわった。特になんの問題もなく、楽しく鑑賞タイムは終わったという。しかし、森山さんの中にはモヤモヤした感情が残った。「あんな感じでよかったのだろうか。本当はなにを話すべきだったのだろうか？ 色や形？ 作品の背景？ 印象？」そんなモヤモヤは、*2熾火のようにくすぶり続けた。【二】


「モヤモヤといっても、それは豊かな時間でした。何度も白鳥さんとの時間を思い返しては、美術鑑賞とはなにか 障害とはなにかなどを考える種となっていました」

その一年後のことだ。森山さんはふと目にした展覧会のチラシに気になる情報を見つけた。「目の見えない人と観るためのワークショップ——ふたりでみてはじめてわかること」とある。それは、NPO、日本障害者芸術文化協会（現在のエイブル・アート・ジャパン）が企画した「このアートでげんきになる エイブル・アート'99」（東京都美術館）の関連プログラムだった。


——もししたら、自分の中のモヤモヤを理解するヒントになるかもしれない。森山さんは参加を申し込んだ。


そのワークショップのナビゲーターとして参加していたのが、偶然にも白鳥さんだった。白鳥さんは、すぐに森山さんのことを声で認識し「あー、森山さんじゃないですか！」と声をかけた。思いがけない再会にふたりは喜んだ。

会期中に3回開かれたワークショップは反響を呼び「視覚に障害がある人の美術鑑賞、すなわち、さわって鑑賞すること」という既成概念を大きく変えるきっかけとなった。また、さわることでできない平面作品を言葉で鑑賞することに大いなる可能性があることを多くの人が発見し実感した。

見える人たちも、一人で見る時とは異なった感覚で作品に向き合うことになり、作品からさまざまなことを発見して感動することが多く、
何度も「からウロコが落ちる」経験をした。

『百聞は一見をしのぐ!? 視覚に障害のある人との言葉による美術鑑賞ハンドブック』

この鑑賞ワークショップは、白鳥さんの個人的な活動にすぎなかった「見えるひとと見えないひとの鑑賞」が、確かな輪郭を持って社会に出ていった記念すべき日となった。この少し前に日本障害者芸術文化協会の関係者と知り合っていた白鳥さんは、このワークショップのナビゲーターになることを承諾した。最初はあまり気がすまなかったが、とにかく勇気を出して人前に立ち、初めて自身の体験や思いを言葉にした。


「人前で話すのは苦手だったから気がすまなかったんだけど、周囲の勧めもあり自分の体験を話しました。でも、その日の様子に関してはあまり覚えてない。俺もかなり緊張していた！」

「このときには、美術鑑賞を仕事やライフワークにするつもりはあったの？」とわたしは訊ねた。

「いや、全然。ただ、自分が個人としてなにが楽しめてなにが楽しめないのか、そういうところから知リたかっただけで」

ワークショップには、参加者とナビゲーターが鑑賞体験について振り返る時間があり、その中で「色について話してもいいのか？」など参加者からたくさんの質問が出た。そのやりとりを聞きながら、森山さんはこの見えないひととの鑑賞は、美術鑑賞とはなにか、そして障害や他者とのコミュニケーションについて考える貴重な体験になる、という確信を持った。そこで、ワークショップが終わると、「うちのボランティアスタッフの研修に来てもらえませんか」と白鳥さんに声をかけた。

特筆すべきは、その目的である。

「それは、見えるひとと見えないひとの差異を縮めることではありませんでした。むしろ視覚障害者の方々と一緒に見ることで、美術館や学芸員、そして鑑賞者のわたしたちのほうも得るものがあると感じました。作品の見方というのとはとてもパーソナルなもので、見えているひと同士でも必ずしも一致しないものです。障害の有無は関係なく、その認識のズレを対話することで埋めることができるのではと思いました」

森山さんが、迷いなく前例のない行動に出られたことには、ひとつの背景がある。それ以前から水戸芸術館では、来館者に向けて対話型鑑賞ツアーを行っていて、その担い手となる市民ボランティアの育成に力を入れていた。前述の森山さんの上司、逢坂恵理子さんは、ニューヨーク近代美術館(MOMA)が提唱する対話型鑑賞の*3 メソッドを日本に紹介したひとりで、MOMAの教育部のスタッフを水戸に招き、全国の学芸員に向けた研修を実施したことがあった。当然のことながら、森山さんもその研修を受けていた。

「驚いたのは、白鳥さんが自然に行っていた鑑賞方法がそのMOMAのメソッドと*4 酷似していたことでした。作品の簡単な描写の積み重ねから鑑賞に入っていくこと。参加者による解釈や意見をひとつにまとめることはせず、答えが出ないもの、矛盾があるものについても、その場でシェアしつつも、無理に答えをひとつに統一しないという自由な鑑賞スタイルであることです」

このようにして水戸芸術館と白鳥さんはドラマチックな再会を遂げた。白鳥さんはそれから年に一、二度のペースで、ボランテアや博物館実習生の研修を担当するようになった。(中略)

ここで話をもう一度一九九五年に戻そう。

好きなひととデートがしたいと初めて美術館に足を運んだ白鳥さん。その楽しい時間がきつかけとなり、美術館へのアプローチが始まった。

「自分は全盲だけど作品を見たい。誰かにアテンドしてもらい、作品の印象などを言葉で教えてほしい、たとえ短い時間でもいいのでお願いします」と粘り強く美術館に電話をかけ続けた――。

白鳥さんは別にライフワークにしようなどと思っていなかったわけではないが、結果的には美術を見る行為を通じて、④それまで「見えるひと」に対して感じていた引け目や「見える」と「見えない」の間の壁が取り払われていったという。

そのきつかけになったのは、ふたつのできごとだ。ひとつ目は、最初にひとりで訪れた名古屋市美術館で一九九六年に行われたゴッホの展覧会。「素描が多かった」と白鳥さんは記憶する。

その日は、とても長い日だったらしい。

いまでこそ白鳥さんは「自分たちが好きなものを選んで見ていこう」「疲れたらやめよう」というスタンスだが、当時はまだまったくの手探り状態だった。それは、アテンドしてくれた美術館のひとと同じで、その日ふたりはなんと一点ずつ時間をかけてじっくりと全作品を鑑賞した。おかげで全七三点を見終わるまでに三時間以上もかかった。

「俺はもうヘトヘトで、そのひとつもずっとしゃべっていたから、相当疲れたろうなと思って、お礼を言おうと思ったら、向こうから先に『ありがとうございます』って言われちゃって。⑤あれ、どういうことだ!?」って。どうやら展覧会の企画側にいても、作品をそこまでじっくり見る機会ってなかったみたいで、むしろありがとうございましたって言われて、驚いた」

助けてくれているようで、実はそのひとつも一緒に見ることを楽しんでた。いつもいつも「ありがとう」と言う側だった白鳥さんが、「ありがとう」を言われる側に逆転した瞬間だった。

ふたつ目は、「目が見えるひと、実はちゃんと見えてないのではないか」と感じさせる面白いできごとだ。それは印象派の作品展で、アテンドしていたのは松坂屋美術館(名古屋市中)の男性スタッフ。何枚かの絵を見たあとに男性は、「一枚の作品を前にして、『湖があります』と説明を始めた。そのあとに『あれっ!』と声をあげ、『すみません、黄色い点々があるので、これは湖ではなくきつと原っぱですね』と訂正した。男性は「自分は何度もその作品を見ていたはずなのに、ずっと湖だと思い込んでいた」と驚いている。

それを聞いた白鳥さんも *5 仰天した。

「ええ!? 湖と原っぱって全然違うものじゃないのって。それまで「見えるひと」はなんでもすべてがちゃんと見えていて思っていたんだけど、「見えるひと」も実はそんなにちゃんと見えてはいないんだ! と気がついて。そうしたら、色々なことがとても気楽になった」

そう、「見えるひと」が、「見えないひと」と一緒に作品鑑賞をすると、⑥自分の思い込みや勘違いにたびたび気づかされる。普段、目が見える人々は、膨大な視覚情報にさらされながら生活しているのだが、細かい情報をすべて脳内処理することは不可能なので、目は必要な場所に注目し、必要な情報だけを取捨選択する。同時に必要のないものは視覚に入ってきてても脳内で処理されない。セレクトティブ・アテンションと呼ばれる認知の

*6 バイアスの一種だ。

この種の認知バイアスを証明したとても有名な「ゴリラ」の実験がある。実験のために用意された動画の中では、黒いシャツと白いシャツを着たグループが狭い場所で動きながらそれぞれバスケットボールをパスし合っている。実験の参加者は、白いシャツを着たグループが何回パスしたかを数えるように求められる。動画の途中では、パスをする人々の間を着ぐるみのゴリラがゆっくりと横切っていく。そしてビデオを見終わったときに「ゴリラはいましたか」と聞かれると、だいたい半数から三分の二のひとがゴリラには気づかなかったと答える。参加者は「見るべきもの」に集中した結果、ほかのものが見えなくなっていた。しかし、パスの回数を数えることを指示されない場合は、たいていのひとがゴリラに気がつくことができた。

同様のことを哲学者の鷲田清一は著書の中でこう書いている。

わたしたちの通常の「見る」は、だから、とても貧しい。見るべく整えられたもの、つまりは見るべきものを見るだけで、あらかた過ぎてゆく。(中略) 眼は意味あるいは記号に感応しているのであって、そこから⑦「見る」ことの野生は脱落している。射るところか、さまようこと、*7 たゆたうこと、まどろむことすら忘れた眼……。

見えるものにある照準を定めるためには、そして見えるものに「世界」という秩序をあたえるためには、おそらくそうした *8 エコノミーがどうしても必要なだろう。『想像のレッスン』

だから美術館に足を運び、長い列に並び、入場料を払い、やつのことで見た作品でも実は見えていないもののほうが圧倒的に多い。しかし、「見えないひと」が隣にいるとき、普段使っている脳の取捨選択センサーがオフになり、わたしたちの視点は文字通り、作品の上を自由にさまよい、細やかな *9 デイテールに目が留まる。おかげで「いままで見えなかったものが急に見えた」というこの松坂屋美術館の男性のような体験が起こる。白鳥さんにとってもこのできごとは、「見る」という概念を揺るがす画期的な体験となった。

「それまでは、たとえ目が見えていても、ちゃんと見る気にならないと見えならしいというのは知識としては知っていたわけ。それは物の見方と
か注意力の話かなって思うんだけど、実感として自分の中にはなかった。だから、見えるひとは見たらなんでもわかるだろうと思ってた。だからこ
のとき、なあんだ、見えるひとも実はちゃんと見えてないんだとわかると、いろんなことが気楽になったよね」

この話を聞いたとき、なるほど、なんて面白いんだろう！と⑧を打った。同時に、こんな風に白鳥さんを開眼させた作品、「湖に見える原つ
ば」とは、いったいどんな作品なのだろうと気になってしょうがなくなった。二〇年以上前の話なので、確認するのは容易ではなさそうだが、まず
はできることから調べてみることにした。

白鳥さんの記憶を改めてたどると、場所は間違いなく松坂屋美術館で、時期としては美術館めぐりを始めてすぐのころだという。ということは、
九六年か九七年だろう。

シンプルにググって見たところ、「印象派・後期印象派展」という展覧会が一九九六年二～三月に松坂屋美術館に巡回したことがわかった。今
度は松坂屋美術館に絞って展覧会記録を調べてみると、その前後にほかの印象派関連の展覧会が行われていない。よし、ビンゴ！

次に図録を手に入れるべく検索を続けた。再びシンプルにググって見たところ、ヤフオクで図録が売られていた。便利な世の中だなあ！と思
いながら、一〇〇円で落札。

届くなり、ページをめくった。原っぱに見える湖ねえ。そんなものは、そうそう転がっているわけがないから、見ればすぐにわかるはずだ。
ページをめくると、すぐにこれという一枚があった。フィンセント・ファン・ゴッホの《アルルの公園、陽のあたる芝生》（一八八八年）。よし、
ちゃんと黄色い点々もある。

念のためほかのページも見ていくと、あれ、ううむ、と戸惑った。A原っぱのような湖のような……という絵が実はいくつもあるではないか。
アルフレッド・シスレーの《オルヴァンヌ河岸の柳》（一八八三年）にカミーユ・ピサロの《ルーヴシエンヌ》（一八七〇年）も怪しい。

すっかり混乱したわたしは、後日、白鳥さんと*10マイティと一緒に図録を見返した。すると、マイティはわたしがピックアップした作品を見
ながら、「えー、これ？ 全然、湖に見えないよー」と図録を取り上げ、別のページを開きながら、「ねえ、これじゃない？ ほら、湖に見えない？」
と言う。それは、完全にノーマークの作品だった。

なんだ、なんだ？ どういうことなんだ？

Bなぜここまで混乱するのが。その原因を紐解く鍵は、「印象派」にある。

印象派の絵はくつきりとした線では描かれておらず、点の集まりや荒々しい筆跡がそのまま残されている。物体としての写実性よりもその瞬間
の「光」と「印象」を優先した結果だ。

図録を前にしたわたしとマイティは「ほかになにか絵のことで覚えてることないの？　ひとがいたとか、天気がこうだったとか」と白鳥さんに聞いた。

「うーん、ずいぶん前だからねえ。覚えていないけど、絵の中に人間はいなかった気がする」

「黄色い点々は確かなの？」

「うーん、そうだと思うんだけど……」

それが唯一の手がかりだった。

最終的に候補として絞り込まれたのは、フィンセント・ファン・ゴッホの《アルルの公園、陽のあたる芝生》、ブランシュ・オシユデ（一八六五～一九四七）の《畑》（一八九〇年頃）、そしてクロード・モネの《洪水》（一八八一年）の三作である。

《洪水》はマイティのチョイスだが、わたしはこれではないと確信していた。なにしろ《洪水》は増水したセーヌ川を描いたもので「水」そのものだし、原っぱと呼ぶには全体的に印象が暗すぎる。

わたしたち三人は、図録の前に、ああだこうだと議論した。しかし、すべては憶測にすぎず、決着がつくはずもない。なにしろ唯一答えを知っている白鳥さんは「そう、これだったよ！」と断言することはできない。そして、松坂屋美術館の男性が誰だったかはわからない。

このやりとりの直後、わたしは奈良県立図書情報館で講演をすることになっていた。テーマはまさに白鳥さんとの美術鑑賞体験である。

よし、こうなったら大勢のひとの力、「集合知」を利用して決着をつけようと思っていた。その日、会場のプロジェクターに三枚の写真を順番に映し、約四〇人の来場者に「どれが原っぱに見える湖だと思いますか」と質問し、挙手してもらった。

答えは、見事にバラけた。意外なことに「洪水」を選んだひとも多かった。

マイティは嬉しそうに言う。

「実は誰も答えがわからないっていうのが、この話のいいところだよ」

⑨ うん、そうなのかもしれない。

（川内有緒『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』集英社インターナショナルより）

〔注〕 ＊１ アテンド…付き添って世話すること。

＊２ 熾火…まきなどが燃えて炭火のようになったもの。

＊３ メソッド…方法。方式。

＊４ 酷似…非常によく似ていること。

＊５ 仰天…予想していなかったことが起きて、非常に驚くこと。

* 6 バイアス…先入観。^{へんけん}偏見。

* 7 たゆたう…ゆらゆらと揺れ動いて定まらないこと。

* 8 エコノミー…経済。




* 9 デイテール…全体の中の細かい部分。細部。

* 10 マイテイ…筆者に白鳥さんを紹介した友人。

問一 — 部①「全盲のひとが美術館に？」と森山さんは驚いた」とありますが、なぜ驚いたのですか。その理由として最も適切な部分を「くから。」に続くように本文中から三十字以内で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問二 本文から次の一文が脱落しているが、どこに補うのが最も適切か。本文中の【一】～【四】の中から一つ選びなさい。

それは、助ける、助けられるという関係が反転するような新たな発想だった。

問三 — 部②  からウロコが落ちる、⑧  を打った」の  に入る言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア. 目 イ. 鼻 ウ. 舌^{した} エ. 腹 オ. 膝^{ひざ} カ. 足

問四 — 部③「見えるひとと見えないひとの鑑賞」とありますが、3ページの終わりまで読み、その方法としてふさわしいものを次のア～エの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 鑑賞体験について振り返る時間をメインとする方法。
- イ. 目の見えるひとと見えないひとの差異を縮める方法。
- ウ. 作品の簡単な描写の積み重ねから鑑賞に入っていく方法。
- エ. 解釈や意見について無理に答えをひとつに統一しない方法。

問五 — 部④「それまで『見えるひと』に対して感じていた引け目や『見える』と『見えない』の間の壁が取り払われていった」とありますが、その理由として次の文が正しくなるように

「見えるひと」は (1) 十七字 (2) 十七字

と思っていたが、実は

(2) 十七字

とわかったから。

問六 — 部⑤「あれ、どういうことだ!」とありますが、その理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. いままでこそ白鳥さんが疲れたら作品の鑑賞をやめるスタンスだが、この日は美術館の人と最後まで全作品を鑑賞したので疲れてしまったから。
イ. 三時間以上かけて説明してくれた美術館の人は相当疲れていたが、白鳥さんにその疲れを気づかれないようにうまく隠そうとしていたから。
ウ. 白鳥さんのほうから先に美術館の人に一緒にまわってくれたお礼を言おうとしたが、逆に美術館の人のほうから先にお礼を言われたから。
エ. 美術館の人は展覧会の企画側にいる立場だが、実は作品についての専門知識が乏しいことを白鳥さんに見透かされてしまったから。

問七 — 部⑥「自分の思い込み」について、あとの各問いに答えなさい。

- (1) 日常生活の中で、自分自身で気づいていない無意識の思い込みが生じていることがあります。その一例として、性別による無意識の思い込みが挙げられますが、その具体例をあなた自身の体験や身近なことにもとづいて答えなさい。

* 文の書き出しは「女の子だから」または「女性だから」で書き、文末は「……という思い込み。」に続くように書くこと。

- (2) (1)で答えた思い込みを解消するために、どのようなことが大切だと思いますか。あなたの考えを答えなさい。

問八 — 部⑦『見る』ことの野生」とありますが、このことを美術鑑賞にあてはめた場合、作品をどのように見ることでか。その説明として

最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 作品をセレクトティブ・アテンションで見る。
イ. 作品についてある標準を定めてから見る。
ウ. 作品について脳の取捨選択センサーで見る。
エ. 作品を自由な視点で細やかな部分まで見る。

問九 〰部A「原っぱのような……ではないか」・B「なぜここまで混乱するのか」の働きとして最も適切なものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア. 自分の意見に対して、読者に明確な同意を得ようとしている。
- イ. 問いかけることで驚きの気持ちを伝えようとしている。
- ウ. 疑問の形を取りながら、反対の内容を強く主張している。
- エ. 問題を投げかけて注意を引き、後から答えを提示している。

問十 — 部⑨「うん、そうなのかもしれない。」とありますが、筆者がそのように考えた理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 美術作品の見方は、人によって違うということを改めて感じさせてくれる話だから。
- イ. 美術作品の見方は、専門知識のあるなしに関係ないということを改めて感じさせてくれる話だから。
- ウ. 印象派の作品の見方は、人によって違うということを改めて感じさせてくれる話だから。
- エ. 印象派の作品の見方は、専門知識のあるなしに関係ないということを改めて感じさせてくれる話だから。

三 次の各問いに答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 次の — 部①～⑩のカタカナは漢字に直し、漢字はその読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 両国のワカイに向けて努力する。
- ② 二十年ぶりに新記録をジュリツした。
- ③ 試合の終盤でケイセイは逆転した。
- ④ 多くの本を読んでキョウヨウを身につける。
- ⑤ 畑をタガヤして野菜を作る。

- ⑥ 久々に家の近くの銭湯に行く。
- ⑦ 母は私のために時間を割いてくれた。
- ⑧ 選手交代の潮時を見極める。
- ⑨ 旅行費を工面するために節約する。
- ⑩ 真つ赤に熟れたトマトを収穫する。

B ことわざ・慣用句に関する問題

問二 次の各問いに答えなさい。

- (1) 次の空欄ア～エにはいずれも漢数字が入るが、その中で最も少ない数はどれか。ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア. 里の道も一歩から
【どんな大きなことも最初は小さなことから始まるものだということ。】
 - イ. 人のうわさも 日
【世間のうわさは長くは続かず、やがて忘れられるということ。】
 - ウ. 聞は一見にしかず
【人から何度も聞くより、実際に一度目にする方がわかりやすいということ。】
 - エ. 悪事 里を走る
【悪い行動はすぐに世間に知れ渡るということ。】

- (2) 次の空欄ア～エに言葉を入れた時、生き物ではない言葉が入るものはどれか。ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 取らぬ の皮算用
【まだ手に入れてないものをあてにして、計画を立てること。】
- イ. 井の中の 大海を知らず
【限られた世界で生きているものは、他に広い世界があることを知らないということ。】
- ウ. 心あれば水心あり
【相手が好意を示せば、自分も相手に好意を示そうと思うこと。】
- エ. 白羽の が立つ
【多くの中から選ばれたり、抜てきされたりすること。】

- (3) 次の空欄ア～エに漢字を一字入れた時、その中で最も画数が少ない漢字はどれか。ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア. 後足で をかける
【お世話になった人を裏切り、去り際にさらに迷惑をかけること。】
 - イ. に短したすきに長し
【中途半端で結局、何の役にも立たないこと。】
 - ウ. 雨だれは をうがつ
【小さなことでも根気よく続けていれば、やがて大きな成果を得られるということ。】
 - エ. 火に を注ぐ
【盛んな勢いのものに、さらに勢いが増すようにすること。】

C 文法・言葉づかいに関する問題

問三 次の(1)・(2)の各グループの中には、――部の性質が他とは違っているものが一つずつあります。それぞれ他とは違っているものはどれかを考え、ア～エの記号で答えなさい。

(1) ア. 幼い頃は泣いてばかりいた。

イ. 遊んでばかりいてはいけない。

ウ. 一週間ばかり旅行に出かけた。

エ. この本には難しい漢字ばかり並んでいる。

(2) ア. 明日までに宿題を終わらせるつもりだ。

イ. となりの町まで散歩に出かける。

ウ. 彼女の髪は肩まで届いている。

エ. 大阪までは新幹線を利用する。

問四 二〇二五年の年末、大妻美代さんは、お世話になった中野先生に年賀状を送ろうと考えました。以下の会話文を読み、あとの各問いに答えなさい。

美代 「中野先生に年賀状を送ろうと思うんだけど、『ハッピーニューイヤー!』とかは良くないよね?」

父 「そうだよ。友達に送るならそれでもいいけれど、きちんと漢字の賀詞がしを使った方がいいね。賀詞がしってというのは、新年のあいさつの言葉のことだよ。」

美代 「年賀状に大きく『迎春』とか『寿』って書いてある。これが賀詞ね。私もこれを使うわ。」

父 「ちよつと待って。目上の人や年上の人に送る時には、横書きだったり一文字や二文字の賀詞を使うのは良くないんだ。こういう時は縦書きで四字以上の賀詞を用いるのが一般的だよ。」

美代 「そうなんだ。相談してよかったわ。賀詞はわかったけど、年賀状ってどういうことを書いたらいいのかな。中野先生も私も寒いのが苦手だから、一緒に乗り切りたいと思ってているんだけど……」

父 「先生を気遣うのは、いいアイディアだね。でも年賀状では『辛い』『終わる』『苦しい』『去る』などの縁起の良くない表現は使っちゃいけないよ。」

ないから注意してね。」

美代 「敬語にも注意が必要よね。私この前、間違って自分の感謝を伝える場面で、『感謝なさっております』って言ってしまったって恥をかいたわ。年賀状では誤った敬語を使わないようにしないと。」

父 「良い点に気がついたね。自分の行動を敬語にする時には尊敬語ではなく、謙譲語けんじょうを使わないとね。お世話になった先生への年賀状だから、先生が良い年を迎えたことを喜ぶ気持ちや健康を祈る気持ちを表す時には、謙譲語で表現すべきだね。」

美代 「二〇二六年の干支えとは何だったかしら？」

父 「昼の十二時のことを漢字二字で言い換えると、来年の干支えとが使われているよ。昔は数字ではなく、十二支を使って時間を表していて、現代でもその影響が残っているのがわかるよね。」

(1) 中野先生に送る年賀状の賀詞として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 初春

イ. 賀春

ウ. 謹賀新年

エ. 去年は大変お世話になりました

(2) 中野先生に送る年賀状の本文について、あとの各問いに答えなさい。

④ 最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 喪中もつちゅうにつき年頭のごあいさつは遠慮いたします

イ. 輝かしい新年を御迎えのことと御喜び申し上げます

ウ. 本年も辛い寒さが続きますがお互い乗り切りしましょう

エ. いつも相談に乗ってくれて感謝なさっております

⑥ ④で答えた文章の後に、中野先生の健康を祈る気持ちとしてふさわしい一文を考えて答えなさい。ただし適切な敬語を必ず用いること。

(3) 二〇二六年にあてはまる干支として最も適切なものを次の語群の中から一つ選び、漢字で答えなさい。

〔語群〕 子ね ・ 寅とら ・ 辰たつ ・ 午うま ・ 未ひつじ

問題は以上です

